

# 議論する友がいたからこそ



「悔しかったり、泣いたりしたこと、必ず力の源になる」と話すドリアン助川さん＝本人提供

「これを読んで感想文を書け」。高校2年の時、家を訪ねてきた友人が突然差し出した本は、ビクトール・フランクルの『夜と霧』だった。「文学に興味を持ったのは、その時からです」と話すのは、作家のドリアン助川さん(本名・助川哲也、54、1981年卒)。

それまでの目標は「京都大学の理系に進み、アメリカンフットボールをやる」。生まれ育った神戸市の親元を中学3年で離れ、両方の目標をかなえられそうな東海に高校から進学した。

高校でもアメフト部で汗を流していたが、その友人が家を訪れて以来、

タックル中でも考えるのは文学や演劇のこと。結局、京都大学は受けず、早稲田大学文学部に進む。

ハンセン病をあつかった小説『あん』(ポプラ社)が映画化されたのは2015年。女優の樹木希林さんらが出演し、フランスのカンヌ国際映画祭で高い評価を得た。

表現者として「迷いの日々」だというのが、彼やそのほかの友人と議論し合った高校時代を小説にしよう、準備を進めている。「高校時代の私の本棚を『貧相だ』と一蹴し、議論を交わしてくれた友人がいたからこそ、今の自分がある」

スポーツ整形外科医の



「一流になるには、尋常ではないくらい何かに没頭することが大切」と話す紙谷武さん

紙谷武さん(43、1992年卒)は、柔道日本代表のチームドクターを務める。

2012年ロンドン五輪の柔道女子57kg級の金メダリスト、松本薫選手の手術を手がけ、いっしょにリハビリに励んだ。「手術、リハビリを経て手にした金メダルなので、本当にうれしかった」

小学3年の時、先天的な心臓の病気で手術を経験。手術で救われた命で「今度は人助けをしたい」と考えたのが、医者を目指したきっかけだ。

道場で柔道を教えていた父親の影響で、小学1年の時から柔道をはじめた。柔道を続けながら、医者を目指せる学校というところで、当時全国優勝をするなど、柔道部が強かった東海に進んだ。

高校は「志が高い人が多かった」と振り返る。好きなことを自主的にやる自由な環境だったため「柔道に熱中できた」。高校3年のインターハイまで柔道一直線。8月から勉強に切り替え、浪人後、宮崎大学医学部に進学した。卒業後は名古屋大学の整形外科教室に入局し、同大の関連病院に派遣された。

仕事でつらいことがあっても、「高校時代の柔道部の仲間と乗りきった練習のきつさを思えば、頑張れる」。 (浴野朝香)